

江戸の宝くじの富

一攫千金、庶民の夢

企画展

開催期間
2018.12.1 (土) → 2019.2.24 (日)

ごあいさつ

年の暮れや夏の風物詩・宝くじ。高額当せん金を夢みて、抽せん会のテレビ中継を見守るという方もいらっしゃるでしょう。江戸時代の人々も、現代の人々と同じ夢を追い求めていました。富（富くじ）への参加です。

たくさんの富札を売り出し、抽せん会「富突き」で当たりの番号を決め、当せん金を渡すという富のシステムは、宝くじの先祖といえるものでした。

本企画展では、江戸時代後期に都市部や各地で流行した富について、当館所蔵の富突き道具・富札・錦絵・刷物などを通して、その仕組みと魅力を幅広く紹介します。一攫千金を願った人々の思いや、富から派生したさまざまな文化をお楽しみいただければ幸いです。

富とは？

「富」は、富札を販売し、当せん金を渡す賭け事の興行でした。大きな木箱の中に、富札と同じ番号を書いた木札を多数入れ、錐で木札を突いて当せん番号を決めたことから、「富突き」とも呼ばれ、江戸時代後期に流行しました。

富突きのルーツ

富突きは、宗教行事で御守を授与する時の抽せん方法で、17世紀中期頃から、摂津国箕面（現大阪府）の瀧安寺や山城国（現京都府）の鞍馬寺などで行われていた。

この方法が江戸や上方の町中でギャンブルとして興行化したことから、享保期（1716～36年）にかけて富突きの禁令が幕府から出された。



「摂津名所図絵」(国立国会図書館蔵)

瀧安寺の富突き
当せん者には御守が授けられた。

富の最盛期

興行化した富は、一か所に大勢の人が集まることや、「簡単に稼ぎたい」という気持ちをおおるため、幕府から規制された。

しかし1810～40年代には幕府の許可を得た「御免富」が都市で頻繁に催され、最盛期を迎えた。

御免富の開催頻度



御免富

18世紀頃から幕府の財政は悪化し、それまで寺社に手当てしていた修復などの資金を出しにくくなった。再建修復資金の調達のため、寺社が幕府の許可を得て興行したのが御免富である。

富突きの道具

富突きの様子

購入した富札を持って大勢の人々が集まり、寺社の舞台などで富突きが行われた。



富箱

多数の富駒が入られ、上部に穴が開けられた。

962001



富札

富突きの前に販売された紙札。組名と番号が書かれている。

(左から) 916733, 916723, 916716



「萬々両札のつき留」
900148

富突錐

富箱の上部の穴から富駒を突き刺した。刺さった富駒の番号が当せんとなった。

962010

富駒

販売された富札と同じ番号が書かれた小さな木札。



962008

富興行の 広がり・隆盛・ 終焉

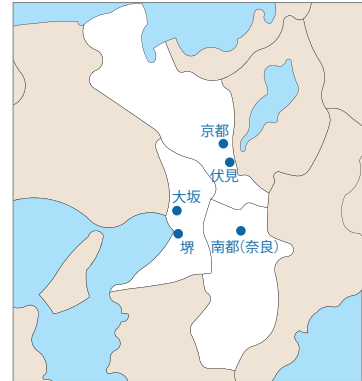
1810～40年代に最盛期を迎えた富興行は、幕末までには都市だけでなく全国各地で盛んに行われました。しかし、富興行が乱立したことや天保の改革の影響、明治初めの法令で禁止されたことなどにより、姿を消していきました。

富興行の流行と地域の拡大

最盛期には、江戸・上方の広範囲で富興行が行われた。



江戸の主な開催地



上方の主な開催地

御免富の乱立と衰退

文政～天保期(1818～44) 幕府の許可を得た富興行「御免富」の最盛期。

江戸では当せん番号を対象にした私的な賭け「影富」(第附)も流行。

天保期(1830～44)

御免富の乱立。富札の大量発行と販売不振で富興行が失敗する寺社が相次ぐ。

天保13(1842)年

幕府により御免富が全面的に廃止。

幕末期 地方への広がり・明治初期の終焉

幕末(19世紀半ば)

富興行が地方へも広がる。幕府により禁止された後でも、富突きを簡単にした「くじ」を使った抽せんが行われた。

明治元(1868)年

明治政府は太政官布告で富くじを禁止、富興行は終焉を迎えた。

明治期(19世紀後半)

富くじは禁止されたが、外国人居留地では商品の入札を装って富興行が行われていた。



地方で使われた富箱と、中身のくじ



居留地で行われた富興行の富札

(左から) 917214, 917216, 917223, 917224

主催者 から見た 富興行

富札1枚の価格は金1朱~金2分で、庶民にとって高価なものでした。

そこで主催者や仲買の富札屋は、庶民が買い求めやすい価格に等分した「割札」を作って販売することもありました。

富仕法書の内容

当せん本数
100回抽せんし、前後賞等を合わせて2,700本余が当せん

当せん金
最高額は金1,000両

興行日
毎月22日

前後賞等の規定

主催者・会場名
湯島(天神)

組名と発行枚数
福・禄・寿・松・竹・梅の6組で、各1万枚
合計6万枚

富札の単価
金2朱

911433

湯島天神の富仕法書

富札の内容

富仕法書に書かれた内容に応じて、興行ごとに多数の富札が発行された。

富札は主催者自らが販売するほか、仲買に卸売りされることもあった。

印章
縁起の良い文様や文句が書かれている

組名
寿(福・禄・寿・松・竹・梅のうち)

開催時期
卯年・霜月(旧暦11月)21日

番号
「八千二百六拾二」

主催者・会場名
湯島天神

916716

富興行の委託
富興行は大掛かりな準備が必要であったため、主催者から興行のプロ集団「富師」に委託されることもあった。

富札の販売促進策

富興行の主催者のなかには、富札を多く売った仲買や、扱った富札が当せんした仲買に対し、報奨金を払うものもあった。



富札を売った枚数に応じて、主催者から仲買へ報奨金(「売ほうび」)を渡すことを定めたもの。

富興行の目的

富興行は寺社の再建修復や、橋などの修復のための資金調達が主な目的であった。



富札購入者から見た富興行

富興行の主催者(寺社など)は、「富仕法書」で開催を広告し、富札を発行しました。富札は事前に富突き会場で販売されたほか、富札の仲買「富札屋」にまとまった枚数で卸売りされました。富札の売行きが興行の成功に直結したため、販売促進を図る主催者もいました。

市中の富札屋

富札は、事前に富突き会場(興行地)で売られたほか、市中の富札屋でも売られた。富札屋の店先では、番号をある程度選ぶことができた。



福德神社の富札
916787



「福徳稲荷」
(日本橋・福德神社)

富札屋の店先
興行地別に分類された富札が棚に並べられた。上部には、興行地名と最高当せん金額が書かれた札も下げられている。



「当世名物簾子 神社仏閣の一乃富」
900155

富札屋が作った割札

正規の富札「本札」を富札屋が手元に預かり、庶民には本札の価格を等分した仮札「割札」を販売することもあった。



「半口」(左)
916764



「十割」(右)
916753

割札には、たとえば
・2等分のもの-「半口」
・10等分のもの-「十割」
などと捺印された。
当せん金もこの割合に等分

当たる富札の選び方 — 夢占い —

購入者は、富札の番号を選んで買うことができたため、番号の選び方が焦点となった。選ぶ際には八卦、眠った時に見た夢の内容と時間帯をもとにした占いなども参考にされた。

四目録の占

数字などによる占い「四目録」を使って、富札を買いに行く方角の吉凶などを占った。

夢の刻限 富札番数の事

夢を見た時間帯を使って、買うべき富札の番号を占った。



911577

夢占

八卦と、見た夢の内容を組み合わせ、富札を買う吉凶を占った。

富札買うに 忌日の事

月ごとに、富札を買う際に避けた方が良い日付と、買うべき日付を挙げている。

展示資料目録は貨幣博物館企画展ホームページをご覧ください。

日本銀行金融研究所

貨幣博物館
CURRENCY MUSEUM

〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町 1-3-1

TEL:03-3277-3037 www.imes.boj.or.jp/cm/

December 1, 2018